

人物の招へい

派遣事業とならんで、人物交流事業の柱となるのが「招へい事業」である。外国の人々に日本人と日本文化についての正しい理解を持ってもらうためには、まず日本に招き、自分自身の目でありのままの日本を見てもらうことが一番良い方法である。

このような観点から、各国の著名な文化人に対しては日本側専門家との意見交換、関連機関の訪問や日本での国際会議出席の機会を提供し、学者・研究者には日本での研究の機会を、芸術家には創作活動の機会を提供している。そのほか、グループ招へい事業として、各分野の専門家・指導者を招へいし、日本側専門家との意見交換、関係機関の訪問の機会を、中学・高校教員に対しては日本の文化、教育現場の視察の機会を提供している。これらの人々は、帰国後も各分野において、日本の実状について自分の言葉で語り続け、日本理解の輪を広げていくものと期待される。

2003年度の招へい者数は、482名(2002年度からの継続分を含む)であった。

1. 文化人・専門家の招へい

(1) 文化人短期招へい

各国の指導的立場にある文化人を日本に招へいし、日本の関係者との意見交換、共同研究、創作活動などの機会を提供するプログラム。基金海外事務所、在外公館からの推薦に基づく「在外推薦」と、国内諸団体からの推薦に基づく「国内推薦」の2種類があり、招へい期間は在外推薦が15日以内、国内推薦が9日以内である。なお、平成14年度までの「国際会議等出席者招へい」は、平成15年度は「国内推薦」に統合された。

<2003年度事業例>

(在外推薦)

韓国文化芸術大学院院長俞弘濬氏、中国国家話劇院院長趙有亮氏、マレーシアアクターズスタジオ芸術監督ジョー・ハシャム氏、ブータン国立図書館所長トルク・ミニャク氏、カナダパワープラントギャラリー館長ウェイン・ベアワルト氏、メキシコ国立シネマテーク事務局長マグダレーナ・アコスタ氏、アルゼンチンブエノス・アイレス市立サン・マルティン劇場映画部門責任者ルシアーノ・モンテアグード・テヘドル氏、アフガニスタンカブール大学学長モハメッド・ポパール氏、エジプトアインシャムス大学外国語学部長マカーレム・エルガムリー氏、ニカラグア国立ルベン・ダリオ劇場館長スーサン・デ・アゲリ氏、ポーランドワルシャワ王宮館長アンジェイ・ロツテルムンド氏など、32名を招へいした。



文化人短期招へい

(国内推薦)

イラン映画監督バフマン・ゴバディ氏、米国現代美術家アラン・カプロウ氏、オークランド大学代表特任教授ブライアン・ポイド氏、マリ文化省文化財保護局長テレバ・トゴラ氏など、26名を招へいした。

2. 国際交流基金フェロースHIP(招へい)

日本の文化や社会を研究しようと志す諸外国の知識人を援助し、その増加を図ることは、対外文化交流事業を促進する上で極めて重要である。招へいフェロースHIPは諸外国の優れた学者、研究者、芸術家などの専門家を招へいし、日本で研究・調査・制作などの活動を行なう機会を提供するもので、以下のとおり対象者別に6つのカテゴリーがある。平成15年度は、日本と中国の次世代の研究交流を促進するため、日中国交正常化30周年記念事業日本側実行委員会からの寄附により、中国の次世代を担う若手研究者を招へいする「中国次世代日本研究フェロースHIP」を15・16年度に限り実施することとした。また、フェロースHIPのネットワーク形成のために、フェロースHIPのデータベースと掲示板を中心とするウェブ・サイトの運営も実施している。

公募事業であり、基金海外事務所、在外公館からの推薦を参考にし、将来日本と当該国の架け橋になりうる研究者・専門家を採用。2003年度は、東北アジア経済研究を幅広く展開する対外経済政策研究院研究員の趙明哲氏(韓国)、也斯のペンネームで詩人としても知られる嶺南大学教授(比較文化論)の梁秉鈞氏(香港)、ハワイの代表的な日本語学者・社会言語学者であるハワイ大学教授のカツエ・レイノルズ氏(米国)、南米で禅宗研究を進める数少ない日本文化研究者であるサンチアゴ国立大学講師のルイス・ディアス氏(チリ)、イタリア日本語教師会会長で日本の古語研究で知られるヴェツィア大学教授のアルド・トリニニ氏(イタリア)、京都ビエンナーレにおいて日系人としてのオリジナリティ溢れる作品を発表するとともに京都芸術センターとの新たな共同制作を進めるメディア・アーティストのティール多美子氏(米国)を始めとする159名(2002年度継続分56名を含む)を採用した。

(1) 学者・研究者(2~12か月)

人文・社会科学分野の学者・研究者で日本に関わる研究(比較研究を含む)を行なう者。

(2) 博士論文執筆者(4~14か月)

人文・社会科学を専攻する大学院生などで、博士号を得るために必要な過程を修了し博士論文提出の資格があり、学位論文作成のために来日する必要がある者。

なお、上記(1)、(2)のフェロースHIPは、以下の特別フェ

ローシップを含む。

(イ) 旧ソ連・東欧諸国若手研究者(特別フェローシップ)(2～12か月)
旧ソ連・東欧諸国の社会科学分野の若手研究者が対象。

(ロ) 南西アジア地域日本研究特別フェローシップ
南西アジア地域の人文・社会科学分野の研究者で日本に関わる研究・調査を行なう者が対象。

(ハ) サハラ地域などフェローシップ
サハラ地域など(ハバロフスク、ウラジオストクなどの極東地域を含む)の学者・研究者・芸術家が対象。

(ニ) 中国次世代日本研究フェローシップ
2002年「中国年」・「日本年」フォローアップ事業。中国の次世代を担う若手日本研究者を対象に、日中国交正常化30周年記念事業日本側実行委員会の寄附金により、2年間に期間を限定して実施。

(ホ) 中東知的交流事業フェローシップ
中東地域の知的交流を担う研究者が対象。

(3) 芸術家(2～6か月)

音楽家、画家、彫刻家、舞台演出家、映画監督などの芸術家および作家・脚本家、学芸員など芸術分野で日本において制作・調査などの活動を行なう者。

(4) 特定地域専門家(4～12か月)

ODA対象地域に関する研究を行なう専門家、同地域の国籍あるいは永住権を持ち、日本国内の研究機関などで指導または共同研究を行なうために来日する者。

(5) アーティスト・イン・レジデンス(2～6か月)

日本国内のアーティスト・イン・レジデンスに参加する芸術家など。

(6) 短期フェローシップ(21日～60日)

北米地域のすでに実績のある研究者で、短期集中型の調査などのため来日する者。

学、ホームステイ、教育関係者との意見交換を行なった。

(2) 指導者・専門家グループ招へい

文化の諸分野で活躍している海外の専門家を10名程度のグループで招へいするプログラムで、日本の社会・文化視察のほか当該分野の日本側専門家との意見交換などの交流の機会を提供している。

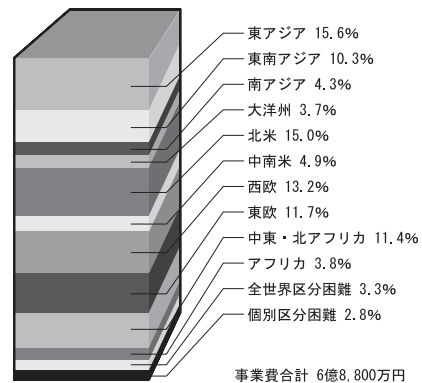
2003年度はフランス現代芸術専門家グループ(15年度からの継続、7名)、中国アートコーディネーターグループ(5名)、日本研究情報専門家グループ(14名)、中・東欧舞台芸術関係者グループ(6名)、英語圏舞台芸術関係者グループ(10名)、中東女性雑誌編集者グループ(8名)など5グループ(50名)を招へいし、日本の関係者との意見交換、関係機関の訪問・視察の機会を提供した。

4. 在外日本古美術品保存修復事業

外国の美術館が所蔵する重要文化財級の日本古美術品を日本に移送し、国内の工房で修復を完了させ返却する事業であり、東京文化財研究所などと協力して実施している。

2003年度は古美術修復作品の絵画4点(サンフランシスコ東洋美術館、シアトル美術館、ホノルル美術館)および工芸品1点(クリーブランド博物館)を搬入し、修復の終わった絵画1点(ネルソン・アトキンス美術館)と工芸品1点(フィラデルフィア美術館)を返却した。また、2002年度に輸入した工芸品2点(メトロポリタン美術館)は継続して修復を行なった。基金はこれらの事業実施に関し、日本古美術品所蔵美術館の学芸員5名を招へいし、修復現場視察の機会を提供した。

地域別比率



3. グループの招へい

(1) 中学・高校教員グループ招へい

諸外国の中学・高校の社会科教師を中心にグループで招へいし、日本の教育、文化、社会の実情を視察する機会を提供することにより、各国の学校教育を通じた日本理解を増進することを目的としている。2003年度は210名を招へいした。15日の間、東京、京都、広島およびその他の地方を訪問して、学校の視察、文化、産業施設の見



中東女性雑誌編集者グループ